創元社創業
130周年記念出版

図説 日本の城と城下町〈全10巻〉

城郭を中心に発展してきた
町の歴史・文化を探訪するシリーズ

図説 日本の城と城下町⑨
熊本城

稲葉継陽・監修

築城の名手である加藤清正がつくり、細川家が支えた城下町の見どころを写真、古地図、地形図とともに案内するシリーズ第9弾。

フリーアナウンサー
武田真一氏
巻頭インタビューも収載

シリーズ一覧

① 大阪城
② 姫路城
③ 江戸城
④ 名古屋城
⑤ 金沢城
⑥ 松山城
⑦ 彦根城
⑧ 松江城
…以下続刊（全10巻）

図説 熊本城ものがたり

戦国の世が幕を開け
茶臼山に城が建つ

熊本城の前身「隈本城」の誕生

応仁の乱（1467-77）の頃、肥後国隈本（現在の熊本市）は守護の菊池氏の支配下にありましたが、住居も耕作地も大変小規模なものでした。坪井川と白川の2つの川がくり返し氾濫し、辺りのほとんどが湿地帯となっていたためです。

しかしこの隈本には、国府であり商工業でも栄えた二町木と、承平5年（935）から拓られていた藤崎宮（現在の藤崎八旗宮）がありました。応仁元年（1467）当時の守護である菊池重朝は出田秀信を派遣し、茶臼山の東に千葉城を築かせています。

その後、出田秀信が戦死したことにより、出田氏の勢力にかげりが見えてきます。国府や藤崎宮の維持に腐ありと考えた菊池氏は、廃千本親鎮を派遣し、茶臼山の西に新たに隈本城（後の城）を築かせました。この城が、現在の熊本城の前身となります。

秀吉の信頼あつい清正が隈本城主に

天正15年（1587）、豊臣秀吉は、薩摩（現在の鹿児島県南部）の島津氏を討伐し、九州平定を成し遂げます。その際、当時島津側につき、隈本城主であった城氏は、隈本城を秀吉に明け渡していました。秀吉は九州の土地を配下の武将に与え、肥後は佐々成政に任せます。その際秀吉は、3年間、検地（江戸時代の土地の測量調査）を行うことを禁じました。これは肥後をすみやかに支配するための方策だったと考えられています。

しかし成政は秀吉の国衆対策を無視し、税収確保のために検地を行おうとしたため、国衆が反発し、一揆が蜂起します。成政は一揆の鎮圧におもむきますが、ことごとく敗北し、隈本城は国衆によって包囲されてしまいました。

加藤清正の肖像　朝鮮出兵での碧蹄館の戦いで戦を生き残った経験を生かし、熊本城を築く。

事態を重く見た秀吉は、九州だけでなく四国からも援軍を送り、一揆の鎮圧に成功します。命令に背き大失態を演じた成政は罰を問われ、切腹となりました。

天正16年（1588）、秀吉は2分割されることになった肥後の南側を小西行長、北を加藤清正に与えます。そして清正は隈本城に入城することになりました。

加藤清正は9歳のときから秀吉に小姓としてつき従っていました。成長するとともに数々の戦いで武功をあげ、柴田勝家と争った賤ヶ岳の戦いでは「七槍七本槍」の1人に選ばれるほどでした。

秀吉から領地を与えられた清正は、隈本城の改修にかかります。もとは佐々成政が命じられていたものでした。南には降伏してもなお不気味な存在である島津氏が控えていたこともあり、早急な改修が必要となりました。しかしその間、清正は肥前名護屋城（佐賀県唐津市）築城や朝鮮出兵にたずさわっていました。

防御が不十分という弱点から新城築城の計画があったものの、出費も激しく財政問題を抱えていたこともあり、進んではいませんでした。ところが、転機は二度

藤崎八旗宮　茶臼山に国家鎮護の神として勧請されたのが始まり。社地が熊本城台所地になり現在地に移転。

17 図説 熊本城ものがたり　16

創元社　定価1,650円（1,500円）⑩　A5／並製／160頁